

## 失われた中心を求めて

——日本における画一的な思考とその功罪——

佐 和 達 見

- I. はじめに
- II. 文化を取り巻く流れ
  - 1. 20 世紀の展開
  - 2. 21 世紀の展開
- III. 60 - 70 年代における文化、あるいは地域へのまなざし
  - 1. 60 年代という転回点 —近代に対する異議申し立て
  - 2. 現在まで通底する画一的な思考
  - 3. 全総などにおける観光へのまなざしとその問題点
- IV. 何が必要なのか
  - 1. 中心の不在
  - 2. 創造のあり方
  - 3. 創造の前に取り戻すべきもの

### I. はじめに

2009 年、F・T・マリネッティ (F・T・Marinetti) がフィガロ紙に「未来派宣言」を発表して、ちょうど100年を迎えた。マリネッティ、そしてイタリア未来派が賛美した機械、速度、力、エネルギー、そしてノイズは、まさに20世紀工業化社会の「発展」の象徴でもあり、また、それは20世紀の「破壊」の象徴でもあった。

21世紀に入り、ポスト工業化社会へとシフトしていくなかで、大きく注目を集めているのが文化の有する「力」である。経済発展が物質的に「豊かな社会」をつくり出し、ひいてはそれが文化を発展させ、文化の成熟が社会の精神的な豊かさを増進するのみならず、文化が付加価値を生み経済成長に資するといった、経済と文化の間のポジティブ・フィードバックの関連があることが認識されつつある。こうした経済と文化の相互依存関係についてのパラダイム・シフトが求められている。すなわち、経済が文化を支えるのみならず、文化が経済を支えるという側面が、ポスト工業化の進展に伴い、より一層、際だち始めた。

このような状況において、文化芸術による地域再生や経済発展などを目指そうとする国や地方自治体の取り組みも数多く始まっている。しかしながら、その地に根ざした文化資本を活かした産業発展や観光振興による地域振興策は、何も 21 世紀になって始まったものではない。戦後復興期から高度経済成長期へと進む中で、所得格差、都市の肥大化と地域の疲弊などさまざまな問題が噴出し、これらの問題への対処としてすでにその地に根ざした文化を重視した地域振興計画は存在している。また、戦前の都市美運動やその周辺の批評の中にも、美と都市あるいは地域の発展を同一線上に据えた思考を見出すこともできる。

本稿では、現在行われている、あるいはこれから行われていく文化芸術を活かした都市再生、地域再生が以前のものとの相違（あるいは焼き直しであること）を明らかにするため、60 - 70 年代に行われてきたこと、あるいは文化と深い関わりを持つ人々の発言などを検証するなかで、現在の状況の問題点と課題について考えていきたい。

## Ⅱ. 文化を取り巻く流れ

### 1. 20 世紀の展開

本章では、まず、文化の周縁でどのような政策的な、社会的な流れがあったのかについて、簡単に振り返ってみたい。志賀野桂一は日本の文化政策が「大局的に見たとき良くも悪くも先行するハード整備に追いつくためのソフト事業という側面が否めない。国も地域も先見的な政策ビジョンに欠けていると言わざるを得ない」<sup>1)</sup>と、文化政策が箱物優先であることを批判する。2004 年に開館し、21 世紀型の美術館の成功例として名高い金沢 21 世紀美術館の初代館長であった箕豊も同様に、「これまで国土交通省は何がなんでも道路を作ろうとして街を破壊してきた。道路が出来れば、人々は車に乗って郊外の大型ショッピングセンターやディスカウントストアに流れていき、古くからの街は物理的にも経済的にも壊滅的な打撃を受けた」<sup>2)</sup>と開発重視の政策展開を批判的に述べている。世界各地から視察が来るほどの成功を収めている金沢 21 世紀美術館であるが、その成功の要因としては、次のようなことが挙げられよう。まず、従来のように美術館を核とする周辺の開発、つまり美術館とその周辺を含めたテーマパーク化をせず、金沢駅から美術館までを結ぶアートアベニュー構想を立てたことにより、人の流れができた。これにより、周辺の商店街の閉じたシャッターが再びあがり、また新規出店の補助などもあり、商店街を再興させるなど、周辺の経済効果を生み出したことである。次に、体験型作品を多く展示することにより、難解でわかりにくいイメージのある現代芸術への壁を取り払った<sup>3)</sup>。また、建物自体も開放的なものにした。このことにより、子供にもわかりやすく、彼らが再度訪れたい美術館となったことで、親子連れの集客に成功した。これは、初年度入場者 154 万人のうち 4 割が金沢市民（38.5 万人 / 金沢の人口 46 万人）であったことから顕著である。この成功例は、まずハードありきの政策であり、その後周辺の開発、最後にソフト面を補完するという、日本の悪しき現状を打破する起爆剤となるものとして、大きな期待が寄せられている。

箕や志賀野が指摘しているように、日本では文化政策に限らず、ハードありきでの政策が当

たり前のように行われてきた。志賀野は「我が国の文化政策は、明治以来近代化、富国強兵の国是の下で、一貫して欧化政策を採ってきた。その中で日本の伝統芸能の遺棄、大衆芸能に対しては統制の歴史であった」<sup>4)</sup>とし、日本における本格的な文化政策の始原を大平内閣の文化立国論以降とする。そして、「戦後文化財保護法成立による1950年代～70年代は、文化財保護政策を主とする『保護対象としての文化』であった。80年代からは国民意識の変化、つまり物質的な豊かさから精神的な豊かさを求めるトレンド変化を経て『創造対象としての文化』政策への転換を遂げた」<sup>5)</sup>とする。

このようなトレンドの変化に加え、バブル経済と企業メセナブームにより、文化を取り巻く環境は大いに好転したのであるが、しかしそれも、バブル崩壊と長期の不況により一気に停滞の方向へとシフトしてしまう。これは、日本の文化を取り巻く環境が、「文化が経済の領域外におかれ、経済の余剰でメセナなどの文化事業が行われていた」という言わば『文化とは道楽なり』という考え方であった」<sup>6)</sup> ことに大きく起因していると言えよう。

## 2. 21世紀の展開

21世紀に入り、「文化」あるいは「文化・芸術」といったものに対しては期待が高まってきているということは今や周知のことと言えよう。これは、「経済的な価値や潜在力を排除した文化に対する視点から文化が潜在的にもっている可能性を引き出し、それを積極的に活かすべきであるという視点へと変わってきている」<sup>7)</sup>と指摘されるように、文化の成熟が精神的に豊かな社会を創り出すということだけでなく、文化が経済的な付加価値を生み出すという、経済と文化の間のポジティブ・フィードバック関係が再構築されつつあることをも意味する<sup>8)</sup>。このような状況において文化政策、あるいはアートマネジメントを取り巻く環境について志賀野桂一は、「2001年を起点に二つのパラダイムが交錯している」<sup>9)</sup>という。9.11あるいは文明の衝突などに代表される世界的なフレームワークの変化と文化芸術振興基本法の成立がその二つである。特に、さまざまな規制緩和の流れの中で成立した文化芸術振興基本法により、「文化の地方分権化とは逆の現象が起こっている。文化資源の首都圏集中も依然続き、文化庁の予算の急増に対する地方自治体の文化予算の低下傾向にも現れている」<sup>10)</sup>と指摘し、現在、厳しい社会経済情勢の中で文化政策もその転換を余儀なくされており、このような状況を切り開く方策として「創造都市論」に大きな期待を寄せている。黒川紀章はこの創造都市論の隆盛について、「経済と文化が相反するものではなく、共生すべきものになってきている」<sup>11)</sup>ことが大きな要因であると述べている。志賀野は、この創造都市論は、「文化の多元的価値をテコに都市の経済的価値と社会関係価値を高めるという可能性に満ちた都市マネジメント論」<sup>12)</sup>とし、「アートの潜在的に持っているプラスの特質を活用して都市作りに生かす道筋を示した」<sup>13)</sup>とする。そして、この創造都市論を有効に活用するためには、「文化芸術が本質的に持つその毒素をも含めた多面的価値を『創造』という無菌的な価値でのみ捉えてはいないか」という批判がある。創造性とは何か？という文化芸術の内実の検証と政策に転換するプロセスを十分に分析される必要がある」<sup>14)</sup>と述べている。

この創造都市論的な思考は、文化芸術振興基本法に基づく第一次基本方針（2002年）、第二次基本方針の中に見ることができる。2002年12月10日に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本方針（第一次基本方針）」の中では、「文化の在り方は、経済活動に多大な影響を与えるとともに、多くの産業の発展に寄与し得るものである」と、文化と経済のポジティブ・フィードバック関係が指摘されている。また、2007年2月19日に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本方針（第二次基本方針）」では、「①人間が人間らしく生きるための糧となるものであり、②人間相互の連帯感を生み出し、③より質の高い経済活動を実現するとともに、④科学技術や情報化の進展が人類の真の発展に貢献するように支えるものである。さらに、⑤文化の多様性を維持し、世界平和の礎となるものである」と文化芸術を定義した上で、「今日では、文化芸術の持つ、人々を引き付ける魅力や社会に与える影響力、すなわち、「文化力」が国の力であるということが世界的にも認識され、また、文化芸術が経済活動において新たな需要や高い付加価値を生み出す源泉ともなっており、文化芸術と経済は密接に関連しあうと考えられるようになった」と、文化芸術の社会的役割の重要性を指摘し、「文化芸術は古今東西の様々な人々の営為の上に生まれ、その継承と変化の中で新たな価値が見出されていくものであり、短期的な視点のみでその価値を計ることは困難である。こうした文化芸術の特質を踏まえ、文化芸術活動の短期的な経済効率性を一律に求めるのではなく、長期的かつ継続的な視点に立った施策を展開する必要がある」と、文化と経済の間のポジティブ・フィードバック関係とともに、経済的価値とは別の長期的な視点からの政策決定の必要性を説いている。

さらには、横浜市のクリエイティブシティ、札幌市のアイデアズシティ、浜松市の創造都市、京都市の文化芸術都市創生計画など、さまざまな自治体の取り組みにも組み込まれており、現在の都市政策、地域政策において「創造」という言葉を取り入れることは、現在一つの流行とも言えよう。

チャールズ・ランドリーは、「文化施設をつくる、文化的なイベントをやるといったことでなく、都市に住んでいる人々が行政も市民も含めて、誰もが固定概念にとらわれず、創造的な発想で暮らしていくうちに、都市の抱えるさまざまな問題が解決する」という考えから、creative cityという概念を提唱した<sup>15)</sup>。この創造的都市について、後藤和子は「そこにすでにいる人々やその地域の資源を最大限活用してその創造性を引き出し都市再生に結びつけ、(中略)社会的弱者の社会参加の問題を丁寧に扱い都市の創造性に結びつけ、(中略)時にはマイナスとも思われる地域条件をプラスに転化させる」可能性を持つという<sup>16)</sup>。

このように現在、創造産業や創造的都市への関心が高まるなか、後藤和子は「創造的でないと思われた職種が創造的になることが重要である」<sup>17)</sup>と指摘する。創造的とは思われていなかった職種を創造的にするため、言い換えれば、これまで芸術文化に興味を持ってこなかった人々に対して、どのように芸術文化に興味を持たせていくのが重要であり、そのためには、何が必要となるであろうか。ここで求められるものは、いかに人々が集い、創造的とは何かについて語り合える場を設けるかであり、けっして美術館や博物館、あるいは公園といったような文化施設を新たに作っていくことではないだろう。そして、いかに持続的に場の提供を行って

けるかどうかが一番の問題であろう。またそのインターフェイスとしてのアートマネジメントの役割も大きいと言えよう<sup>18)</sup>。

### Ⅲ. 60 - 70 年代における文化、あるいは地域へのまなざし

地域の疲弊や所得の格差は、何も戦後になっておこってきた問題ではない。例えば、『蟹工船』などに代表されるようなプロレタリアートの作品が訴えたことも、その一例と言えよう。あるいは、明治維新以降、日本が近代化を進める中で、必然的な問題であったとも言える。一方で、20 年代に駐日フランス大使として日本で生活を送った詩人ポール・クローデルは『朝日の中の黒い鳥』の中で「日本人の魂の伝統的性格とは、崇敬の気持であり、うやまいの対象の前でみずからの個我を小さくすることであり、自分たちをとりまく生命あるもの、なにものに対して検挙か心遣いを捧げることである」といい、日本人は貧しい、しかし高貴だと評した<sup>19)</sup>。また、時期は若干遡るが、鏑木清方は随筆集『明治の東京』の中で、20 世紀の最初の頃は「江戸から持ちつづけた姿勢の行事四時の行楽、そのころの市民は黙って働き、よく遊んだ、私の過して来た一生ではこの期間が万人の住みよく暮らしいい時だったように思える」<sup>20)</sup>と述べている。それが、1995 年に来日したジャン・ボードリヤールの目には、「日本が豊かであるのは、国民が貧しいからだ」と映った。貧しくも高貴であった日本人が、なぜ心身ともに貧しくなったのだろうか。そして、その方向に進み出したのはいったいつ頃からなのだろうか。本章では、クローデルの時代と、ボードリヤールの時代の間位置する 60 年代に、あるいはもう少し広く、戦後復興期を終え、高度経済成長期を迎え、政治から経済へと中心がシフトする 55 年体制から 70 年頃までの間にその分岐点を置いて考えてみたい。

#### 1. 60 年代という転回点 —近代に対する異議申し立て

60 年代を大きな転回点とみる向きがある<sup>21)</sup>。特に、1968 年をまたぐ数年には、政治、経済、社会、文化、芸術、あらゆる分野で、そしてあらゆる地域で大きなうねりがおきた。これらは、世界的に見て数百年にわたる近代化への異議申し立てとみることもできる。山室信一は日本の 60 年代について、「高度経済成長がもたらすさまざまな社会の歪みの問題や個人にのしかかる不安を前に、また高度経済成長の過程で捨て置かれることになった公害や僻地などに着目することによって改めて人間性とは何か、個人が文学者や知識人として生きるとは何なのか、を原点から問い直すことが 60 年代を通じて切実な課題としてせりあがっていった」<sup>22)</sup>とし、その中で共同体などの喪失したものへの回帰としてのプレ・モダンと、近代を超越しようとするポスト・モダンという二つの相反する志向性が現れたと指摘する。山室のいうプレ・モダンの志向性は、特に、文化・芸術の分野での地域、あるいは人、社会の再認識の動きの中に顕著であった。このプレ・モダ的な流れの中に、現在に通じる地域へのまなざしの端緒を見いだすことができる。

ちょうど明治 100 年にあたる 1968 年は、1964 年の東京オリンピックと 1970 年の大阪万博とのあいだであり、経済的にも、社会的にも、文化的にも、近代国家として先進国への道を勇往

邁進していた。一方で、公害問題や、一極集中などによる劣悪な生活環境など、進んできた道のさまざまな負の側面が表面化してきた時期であった<sup>23)</sup>。正負入り乱れたさまざまなことが眼前でおきていくなかで、山室の指摘するアンビバレントな志向性が生まれていったと言えよう。

文芸批評や小説の中にも、桂秀実『革命的な、あまりに革命的な』、『1968年』や、四方田犬彦の『ハイスクール1968』、『歳月の鉛』、村上龍『69 sixty nine』、村上春樹『ノルウェーの森』など、この時期を扱った作品が数え切れないほどあることは、この時期が如何に現在においても魅力的な、はたまた妖しげな光を放っていることを示しているのではないだろうか。四方田犬彦の『ハイスクール1968』を読むと、この時代の高揚したなかでどこか終焉に近い、ハイでありながらどこかデカダンスな雰囲気伝わってくる。中学生や高校生がマルクス、エンゲルスを読み、大学生の活動家の指導のもと、革命を信じ政治集会に参加している。しかし、その裏で、渋谷や新宿に出かけ、ジャズ喫茶でフリージャズの洗礼を受け、退廃的な美術や文学にどっぷりとつかう。村上龍の『69 sixty nine』は、同じく高校生が主人公であり、学校封鎖をストーリーの根幹にもちながらも、そこに描かれる空気感は全く異なっていることは注目すべき点である。『ハイスクール1968』の舞台が東京であるのに対し、『69 sixty nine』では長崎県佐世保市が舞台であることが、二作品に異なる雰囲気をもたらしている。この二作品の相違に当時の都市と地域の違いを見いだすこともできよう。また、同じ1969年を舞台にしていながらも、まったく別の雰囲気を醸し出しているのが村上春樹の『ノルウェーの森』である。同じ時期にデビューし、現代日本を代表する作家である二人の村上が、同じ1969年を舞台とし、その青春を描きながらも似て非なる作品を作り上げたことは、非常に興味深いものである。あるいは、ここにこの時代特有のアンビバレントな感情を見いだしてもよいかもしれない。

ではなぜ、プレ・モダンな志向がうまれていたにもかかわらず、さらなる一極集中化と地方の疲弊が加速度的に進んでいくことになってしまったのだろうか。吉見俊哉は、60年代を通して日本人の日常生活は平準化されていったという。吉見は、高度経済成長によって、農村と都市、経営者と従業員、職種間などさまざまな経済的格差は相対的に縮小したとして、「公教育の機会均等が一応保証されるなかでの全般的な高学歴化、ホワイトカラー層の拡大、大量農村人口の都市への流入と急激な核家族化、そして伝統的秩序意識の解体も、全国レベルでの日常生活の平準化を促していた<sup>24)</sup>と述べている。これにより、中流意識は拡大し、「一億総中流時代」へと進んでいった。経済的格差の解消が全てを豊かにしてくれるであろうという一種の幻想のような感覚がうまれていたのではないだろうか。幻想によって生み出された無関心が、プレ・モダンのものの流れが生まれながらも、なぜか地域の都市化、画一的な地域づくりへと進んでいった一因とも考えられる。

## 2. 現在まで通底する画一的な思考

60年代を通じて、一極集中や都市と地方の格差が問題視される中で、一方では、経済的な格差は相対的に解消されつつあるというアンビバレントな現象が起きていた。その原因はどこにあるのか。作家堺屋太一は、通産官僚時代に本名池口小太郎の名で著した『日本の地域構造』

の中で、日本の地域構造が「同心円上の中央集権的な形であるとともに、経済的な動向や実質的な集積の面では東西に二つの焦点をもつ楕円形構造をなす」<sup>25)</sup> という二正面的な特徴を古来より持っていたと指摘する。それが明治維新によって中央集権制度が完備され、戦後、より一層の東京の過大化と全てのものの集中により、楕円型構造が崩壊の危機にあるという。同様の指摘は1969年に出版された小松左京の『日本タイムトラベル 変貌する地域社会』の中にも見ることができる。小松は、明治維新とその後の近代化百年は「江戸＝東京単中心時代の完成期」であり、京都からは都＝シンボルの中心性、大阪からは経済の中心性を引き抜いたという<sup>26)</sup>。堺屋や小松がいうように、中央集権的なシステムの完成がこの60年代であったということは、すなわち、古来からの地域の構造が崩壊し、そして、それぞれの故郷＝帰るべき場所が喪失したことを裏付ける。この動きに対して、異議はあったものの、都市での生活と同じものを地域で行うことこそが、地域の発展であるという考えのほうがより強く受け入れられていったのかもしれない。この原因は、先から指摘するように60年代におきた生活水準の相対的な格差解消による全国的な中流意識の拡大と、国家レベルでの地域の格差の解消が画一的な地域創造により、一層の東京集中を招くことになってしまったことが挙げられる。国家が、それぞれが独自の文化を持つ多様な地域に対して、画一的な地域像をもって地域開発を行おうとした、そこにこそ、現在我々が感じる地域の疲弊の根源があるのではないだろうか。この方向へと先鞭をうったのが、全国総合開発計画である。

一方では様々な格差が問題視され、他方では格差が解消していくというアンビバレントな状況の中、1962年「全国総合開発計画（以下、全総）」が策定された。その背景には、高度経済成長への移行の中で過大都市問題、所得格差などが挙げられている。「全域、全国民がひとしく豊かな生活に安住し、近代的便益を享受しうるような福祉国家を建設すること」が究極の目標であったとした全総の前文からも、国家が一方通行的に画一的な豊かさ、それに担う画一的な地域像の創出を目指していたことが伺える。もちろん、それぞれの特色を活かした地域づくりを目指すことは書かれてはいるものの、地域の特徴によって数種類に分割し、その区分けによって支援を行っていくという考え方は、画一的な地域づくりであったとの批判は免れ得ないであろう。

全総が策定された当時、多くの総合計画が各省庁から出されたが、それらについて、池口小太郎は「全国をただ開発の状況からいくつかの段階に分けただけで、開発目標がいずれも同じ工業開発を目ざしたものであり、それぞれの地域の特殊性や特色をもった開発を目途としたものでなかった」<sup>27)</sup> ゆえに、本来あるべき地域完結型の開発にはならず、「全国的な有機体の中で一つの形態の地域を乱造する」<sup>28)</sup> 結果となったと指摘する。地方分権や道州制の導入などの議論の中で大きな問題となっている地方のあり方や、中央と地方の関係について、すでに40年以上も前から指摘されていたにもかかわらず、何ら解決されずにきたことには、榎木野衣が『日本・現代・美術』の中で指摘した「悪い場所」と評した日本に通底する負の側面といえるかもしれない。

池口の指摘は、その後、およそ10年ごとに策定されてきた各全総が、たとえ地域の再生を目指すものであったとしても、本来の意味での地域の発展、再生へとつながらなかった最大の要

因とも考えられる。全総が国家 10 年の計である以上、活力ある経済社会と国土の構築が目指されることは、至極当然のことではある。しかし、「都市の過大化による生産面の諸問題、地域による生産性の格差について国民経済的視点から総合的解決」が目指された全総から、一極一軸型から多極多軸型国土構造への転換が目指された「21 世紀の国土のグランドデザイン（五全総）」までの 35 年ものあいだ、さらには 2009 年に策定された「国土形成計画（全国計画）」にいたる約 50 年のあいだ、結果として地域の疲弊と東京への全ての集中は何ら解決できていないどころか、年々進行しているという現実がある。

未来学者ネズビッツは、グローバル化の進行により、ガバナンスの上方統合と下方拡散がおきるグローバル・パラドックスを予見したが、日本においては上方統合のみが加速し続けているといえる。その一因は、各全総に通底する画一的形態の地域づくりと一方通行的な公共投資という「国→地方→市民」という絶対的な中央集権システムに対して、誰もが至極当然のこととして無関心で居続けてきたことにあるのではないだろうか。絶対的な国と地方の隷属的関係性を批判することは容易いが、池口が「全ての日本人が、肥大症に苦しむわれわれの首都と、貧血に苦しむ日本の地方社会の現実を目の前にしてわれわれの国土をよく考え、正しく理解し直す必要がある」<sup>29)</sup>と指摘するように、その責任の一端は、経済的豊かさと都会的な生活が地方にもたらされることが、地方にとって何よりの幸せであり、地域の個性を無視し、結果的に破壊してきたことに気づかなかつたわれわれ日本人一人一人の無関心にもあるということ忘れてはならない。1968 年に GDP がアメリカに次いで西側諸国で第二位となり、様々な調査からも明らかなように、中流意識が拡大していき、数字的には豊かとなる中で、これらの数字では見えてこない部分を無意識的にはあれ、見落としていってしまったのではないだろうか。

### 3. 全総などにおける観光へのまなざしとその問題点

その地に根ざした文化的資本を活かした伝統産業や伝統文化の保全や、それらを用いた観光振興策を、地域の活性化の策として用いることは、21 世紀型の地域振興策として、さまざまな自治体によって行われている。エコ・ツーリズムやクリエイティブ・シティなど、ポスト工業化社会の議論の中で観光や文化、芸術といったものへの注目と期待が高まり、地域振興の中心に位置しているともいえるが、このような考え方は 21 世紀に入り突然うまれてきたものではない。すでに全総においても、観光振興と地域発展のポジティブな関係性を認識し、地域活性化の策として観光振興などを挙げているように、50 年前から既に言われていたことでもあるのだ。ただし、全総での観光振興策の中身は、「観光開発を推進するところにおいては、広域的な観光地形成に重点をおき、道路、鉄道、空港、港湾等の観光基盤の整備を通じて観光ルートを開発」し、また「ユース・ホステル、国民宿舎、国民休暇村等の宿泊休養施設と自然公園、ハイウェイ・パーク等の整備につとめる」ことを目的としており、いわゆる、土木と箱物に主眼が置かれていたことは明白であるのだが。

谷崎潤一郎は、1962 年 12 月に「京都を想う」という随想を毎日新聞紙上に残している。谷崎はこの随想の中で、かつて過ごした京都下鴨の「潺湲亭（せんかんてい）」での生活を懐かしみ



ながら、京都もまた徐々に近代化されつつあることについて、「数年前に嵯峨へ遊びに行って、あの落柿舎<sup>30)</sup>のあたりにも市営住宅らしいものが並んでいるのを発見し、小倉山の風景がだいなしにされているのを知って驚いたことがあった。そう云えばあの付近の美しい竹藪も、いつの間にか随分伐採されていた。仁和寺の松並木も切られてしまった。今度は又竜安寺の境内を貫いて衣笠山の麓を通り、金閣寺の方面へ突き抜ける観光道路が出来るそう」と嘆き、そして、「何かというとすぐにドライブウェイ、ロープウェイ、そして頂上には展望台、ちゃちなホテル、これがお定まりのコースである。そのくせ満足なトイレの設備費一つない貧困さ」と痛烈に批判する。さらに「地震や火事の多い京都、幸い戦災を免れた京都。人間がよけいな小細工をさえ加えなければ、平安朝以来の美しさを容易に失うことのない都会であることに、くれぐれも思いを致してもらいたいものである」と開発しないことで守ることのできる文化、文化財、そして都市全体の保全を訴える。「日本橋を十文字に切る高架線 大東京の空の乱脈」という歌を残している、いかにも谷崎らしい随想である。

谷崎は全総を意識して書いたわけではないだろうが、まさに全総に盛り込まれた観光振興策に対しての痛烈な否定を読み取ることができる。そしてなによりも、この谷崎の想いは、現在でも十分に、いや現在だからこそより強くわれわれの心を動かしてくれる。道や宿泊施設といったハード面の整備に主眼が置かれ、その中身はトイレすら満足に整備されず、ましてや、そこにある風景やもの、その意義については全く顧みることのない観光地開発によっていったいどれだけの文化が失われていったことであろうか。

そもそも、観光の語源は『易経』観卦にある「観国之光（国の光を観る）」が語源とされる。国家の隆盛の様を観ること、つまり一国の文化の精粹を観ることであり、観ることによって考えることもでき、さらに将来の文化発展の指針とすることもできるという意味である。林屋辰三郎は「観る」ということについて、「観には観るということと同時に、しめすという意味もある。それは主客相互の関係に置かれた文字である。従って観光には、一国の文化を積極的にしめすことが必要である。しめす方の側に積極性がなく、観る方の一方通行になると、せっかくの観光も十分に果たされないことになる」として、観光本義の実現を求めている<sup>31)</sup>。

全総では、観光振興策が道路建設やさまざまな箱物を建設にその主眼が置かれていたが、その後もこの方向性がかわることなく続いてきたことは、ふるさと創生事業が、結局のところ箱物建設やモニュメントの製作などがほとんどであり、無駄遣いの典型と揶揄されたことや、現在取りざたされている国立メディア芸術センターの建設問題などをみれば明らかであろう。このような思考から脱却しないかぎり、現在のエコ・ツーリズムなどの未来もそう明るくはないように思える。全国各地の炭坑閉山後の利活用において、積極的な再開発が、夕張市の破綻に代表されるように壊滅的な結果をもたらした一方で、時の流れに身をまかせた軍艦島が産業遺跡として異様な光を放ちさまざまな芸術家たちを魅了し続け、ついには世界遺産の国内候補になるまでになったことは何を意味するのであろうか。介入したものが崩壊し、介入しなかったものが遺産となったことは、いかにこれまでの再開発がそこに内在した文化的なものを破壊してきたかということの証左であろう。

全総における地域開発の方向性、そして観光振興の方向性に通底していることは、横並びの発展という思考ではなかろうか。地方に小さな都会の建設をめざすことは、地方が、けっして大都市を追い越すことができないということであり、地方は半永久的に中央との隷属的關係を結ばざるを得ない。中央が地方に対して支援＝支配するというかたちが、より一層の中央の肥大化と地方の疲弊を加速度的に進めていったのである。最近になり、ようやくこの中央と地方の關係性を打破しようとする動きが自治体の首長たちによって始まりだした。この動きが今後どのようなかたちとなっていくのかは非常に興味深いことであるが、首長たちの主張が、地域活性化＝その地域の都市化となってしまうことを願うばかりである。

#### IV. 何が必要なのか

##### 1. 中心の不在

このように見ていくと、バブル経済崩壊からいわゆる失われた10年と呼ばれる不況の中で常套句のように用いられてきた「工業化社会からポスト工業化社会へ」という意識は、すでに50年も前から存在していたことは明らかである。そして、そこで語られている根本的な問いのいくつか（特に都市の肥大化と地域の疲弊、さまざまなもの的大都市への一極集中という問題）は、全く同一であり、半世紀の間なんら解決されることなく、そこで用いられるキーワードをすり替えることで変化を見せようとしていただけではないだろうか。では、如何にしてこのような「閉じられた円環」<sup>32)</sup> という状況から、脱却を図るべきなのか、そしてその先に持続可能な文化の発展をなし得ることは可能であろうか。池澤夏樹『パレオマニア 大英博物館からの13の旅』の中に次のような興味深い一節がある。

「都市というのは演出だと男は思う。住むものの幸福や便宜と並んで、訪れた者を呆然とさせるような壮麗な光景を都市は中心に据えなければならない。パリならコンコルド広場、ロンドンならバッキンガム宮殿の前だろうか。アテネではシンタグマ。建物が密集した市街で、いきなり視界が開けるところ。東京ならば日比谷から大手町にかけての皇居側だろうか、どうもあそこは印象が拡散的で、視覚の中心に欠ける。千鳥ヶ淵の側も美しいけれど散漫」<sup>33)</sup>

東京の中心がそうであるのなら、では、他の都市、例えば大阪や京都、横浜、福岡などの大都市においてはどうかであろうか。中心が存在していないとは言えないだろうか。年間観光客数が5000万人を超える京都においても、数々の心揺さぶられる場所は存在しているが、都市としての中心を演出する場は無いように思える。また、横浜開港150周年を記念して2009年4月～9月に行われた「開国博 Y150」の有料入場者が目標の500万人の4分の1にしか満たなかったことも、企画内容以上に、今後の横浜の中心となりうるものを創造し得なかったからではなかろうか。現在行われている「水都大阪2009」は、大阪中心部にある川を口の路に結び回廊を演出していることから、横浜のイベントよりはコンセプトualである。しかしあくまでも一過

性のイベントである以上、終了した後に残るものは余り多くないであろう。

問題は、横浜にしても大阪にしても、あるいは京都の観光、環境、景観などの文化と深く関わりを持つ政策にしても、先に述べた「創造都市論」的な思考、言い換えれば、文化と経済のポジティブ・フィードバック関係へのまなざしをもっていないながら、大局的には成功していないことにある。いったい、何が足りないのであろうか。

## 2. 創造のあり方

文化には必ずその文化が培ってきた歴史が内包されている。それゆえ、文化を破壊することは一瞬で可能だが、それを再び取り戻すのはほとんど不可能に近い。このことは、タリバンによるパーミアンの仏教遺跡の破壊を思い出すまでもないだろう。そのため、文化芸術を重視する都市の政策やまちづくりに対する姿勢には相当の慎重さが求められる。井口典夫は、「コミュニティの変化や文化的な要素を十分に取込まないままに、あるいは世界の動きをほとんど考慮せずに作成される国土計画や都市計画などの物的配置計画は、急速にその意義を失いつつある。現在、都市づくりはハードな基盤（インフラ）整備や容積確保よりも、ソフトなコンテンツに重点が置かれており、従ってそのプロセスもトップダウンからボトムアップに変わってきている。市民の発意と合意形成によって高さや用途の制限を導入した方のエリアの地価が上がり、都市計画マスタープランに描かれていなかった方のまちづくりが市民主導で大規模に実現しつつある。調査・検討・広報活動だけでも多額の税金を使い、国家事業としてトップダウンで推進してきた首都移転やさまざまな研究・産業都市構想が今、どのような状況におかれているかを考えれば、容易に理解できるだろう」<sup>34)</sup>と、その街に住む人やそこにある文化の意義を十分に検討する必要がある、そのためにはボトムアップ式の政策の必要性、重要性を指摘している。

ボトムアップ式、住民参加型のまちづくりは、たしかに現実的、経済的、効率的といった面で、さまざまな利点を持つことは事実である。横浜市や京都市など政令指定都市での取り組みや、その他の自治体での取り組みにおいて、ハード整備一辺倒の政策から、ソフト重視の政策へと移行していく中で、ボトムアップのプロセスが重視されており、少ない予算で大きな効果をうむなどの一定の成果もすでに散見できる。しかし、井口の指摘から危惧されることは、国家レベルでの大規模な施策を全て悪とみなし、住民主体を無批判的に全て最良のものともみなしていないか、という疑問である。

ボトムアップ式の政策の実施は非常に難しいのは想像に難くない。また、実際にボトムアップで出てきたものが、真によいものであると限ったわけでもない。古代ローマの詩人ユヴェリナスは当時の社会を揶揄して「パンとサーカス」という表現を用いた。多くの属州から搾取された巨万の富により、ローマ市民は働かずしてもある程度の富（食、娯楽）にありつくことができた。それは、権力者たちが市民を政治的無関心の状態にとどめるため、食料を配布し、娯楽を提供したからである。このデカダンスな状況は、社会的腐敗を生み、ローマ帝国没落の一因ともなった。この状態を、ユヴェリナスは「パンとサーカス」と諷刺したのである。

パトリック・ブラントリンガーは著書『パンとサーカス』の中で、マスコミの功罪－主に負の側面－によって、「現代世界は、ローマ帝国の衰亡のそれに似た、歴史の段階にはいった」<sup>35)</sup>とし、現代社会はパンとサーカスだと言いきる。もし、ブラントリンガーの言うように、現在が「パンとサーカス」なら、井口典夫が指摘したような市民の声をどのようにボトムアップさせ政策などに盛り込んでいくべきなのか。それ以上に、ボトムアップされたものが全くトンチンカンなものとなる可能性すらある。それでも、ボトムアップ式の必要性はあるのかという疑問がわくのも事実である。

こういった議論の中で、無批判的に受け入れられがちな「国（官）即悪、民即是」ともいえる考え方は、結果的に大きな問題となりうる可能性を持っていることを理解せねばならない。国には国の、自治体には自治体の、民には民の、それぞれの役割があり、これまでこれらの境界を越境的に国が一手に担ってきたことにこそ問題の根幹があるのであり、その無駄な流れを断ち切ることが重要なのである。「国（官）即悪、民即是」という安易な二項対立は、問題の根幹をばやかす可能性すらあり、誰にとっても得策ではないはずである。

民意の大切さ、住民主体の大切さを否定するつもりはないが、それを重視しすぎることもまた問題ではなからうか。無責任な民意をある程度排除するプロセスも必要ではなからうか。悪意の有無に関わらず、無責任な民意もまた文化の破壊や地域を崩壊へと導くものとなりうる可能性を持っていることを忘れてはならない。<sup>36)</sup>

### 3. 創造の前に取り戻すべきもの

二章で見てきたように、日本は戦後復興期を経て、高度経済成長期から現在に至るまで、画一的な地域創造、つまり、地域の小都市化がすすめられてきたことにより、結果として、中央への一極集中と地方の疲弊を進めるばかりで、それを止めることはできなかった。これには、国、地方、民、それぞれに責任がある。国はあくまでも単一的、没个性的な施策を地方に対して押しつけてきた。また、地方自治体は、豊かさイコール地域の都市化であるという思考が強すぎたのか、まるで国の出先機関であるような施策を行ってきた。そして、民は、都会的な生活こそ、豊かな生活であるという考えから、それによって失われるものへはほとんど目を向けることはなかった。最近になって、これらの戦後の流れを打破し、あらたな国、地方、民のあり方をめざし、地方分権や道州制の導入などの訴えがおきている。これらの動きが、夕張に代表されるような安易な再開発や、西陣の例の二の舞とならないためには、創造の前に取り戻すべきものは何かについて考えてみたい。

堺屋太一（池口小太郎）や小松左京が指摘したように、東京が唯一の中心であるというのは明治維新以降の近代化百年におきたことであり、日本は常にいくつかの中心が存在してきたのである。中心であるべき東京にさえ演出的な中心が存在しないことは、日本にとって大きな問題であろうが、何よりも問題なのはなぜ、ここまで東京一極集中が問題視されながら、かつて存在したもう一方の中心に無関心であり、画一的な方向性に進んでいってしまったのかということである。ここにこそ、日本が抱える大きな問題があるのではないだろうか。堺屋や小松の指

摘は、日本全体を対象としたものであるが、各都市各地域においてもやはりこの中心というものの存在を再度よみがえらせる必要があるはずである。

では、取り戻すべき中心とは何であろうか。チェコスロバキア最後の、そしてチェコ初代大統領であるヴァーツラフ・ハヴェルは1990年のアメリカ議会での演説で、「人間の意識の領域におけるグローバル革命以外には、人間のあり方を何一つポジティブに変えることはできず、世界の環境、社会、文化的破局への歩みを止めることはできない」と述べた。川端康成は『美しい日本の私』の中で、「自然、そして人間にたいする、あたたかく深い、こまやかな思ひやり」こそ、日本が古来からもつ美しさの心であると指摘した<sup>37)</sup>。この川端の言葉があらわす美しさの心とは、「上賀茂神社の横の小さな店で夕食をして、夜風のなかを帰ってくる。加茂の河原の土手下の小道に月は明るいが、草むらの虫の声はもう弱々しい。川はいくつもの堰で水音をひびかせ、月と兩岸の木の間の街灯を映して光る」<sup>38)</sup>、このような風景を感じる心である。ここに描写されたような風景の保全だけではなく、感じる心を創造していくこと、これが、ハヴェルの「人間の意識の領域におけるグローバル革命」に通ずる道なのではないだろうか。取り戻すべき中心はクロードルが高貴と評した「崇敬の気持であり、うやまいの対象の前でみずからの個我を小さくすることであり、自分たちをとりまく生命あるもの、なにものに対して検挙か心遣いを捧げる」という人間像であろう。

#### 注

- 1) 志賀野 (2006) p.15
- 2) 蓑豊 (2007) p.33
- 3) ここで誤解してはならないのが、体験型作品というものが、即イコール「わかりやすい」作品であるわけではないということである。
- 4) 志賀野 (2006) p.14 この志賀野の指摘には大いに疑問が残る。果たしてここまで紋切り型で言いきることができるであろうか。明治維新以後は欧化一辺倒の政策がとられてはいたが、20世紀に入る頃からはそういった方向性はかなり緩和されていたはずである。技術や学問を含むさまざまな西洋文化の輸入一辺倒の段階から、その日本的展開を目指そうとした動きがあったからこそ、20年代、30年代のモダニズム運動があったのではなかろうか。また、確かに様々な政策によって文化の統制が行われてしまったことも事実である。しかしながら、30年代の都市美運動に代表されるように、「美」あるいは「文化」というものを重視した政策展開は行われており、一概に全てを統制し破壊してきたとは言えないはずである。
- 5) 志賀野 (2006) pp.14-15
- 6) 黒川 (2006) p.13
- 7) 権 (2004) p.105
- 8) これらの流れの大きな先鞭となったものとして、スロスビーによる文化経済学や、ランドリーによる創造都市論、フロリダによるクリエイティブ・クラスなどの概念の隆盛が挙げられる。また、横浜市の「文化芸術創造都市クリエイティブシティ・ヨコハマ」に代表されるさまざまな自治体での文化芸術に関する施策におけるこれまでの取り組みからの転換などもこういった流れのなかにあるものと指摘できよう。
- 9) 志賀野 (2006) p.13

- 10) 同上
- 11) 黒川 (2006) p.133
- 12) 同上 p.14
- 13) 同上 p.14
- 14) 同上 p.14
- 15) 吉本 (2006) p.14
- 16) ランドリー (2003) p.346
- 17) 同上 p.346
- 18) 林容子は、アートマネジメントとは「アーティストの才能を育て、質の高い芸術を世に生み出す環境を作り、生み出された芸術を限られた資金で効率よく社会に普及させることで人々の心と生活を豊かにするための物的・人的環境を整えるインターフェイス」であるとし、「人々がアートによって感応し、感動する文化の豊かな社会を作り、それによってあらゆる人々を幸福にすること」がアートマネジメントの究極の目的であると述べている (林、2003、p.3)。そして、単に欧米の概念を輸入しただけのアートマネジメントの現状から脱却し、明治以前は芸術が生活の中に成り立っていた状況を再検討し、アートマネジメントがプロのアーティストに対する支援とともに、アマチュアである市民の芸術活動の推進にも力を入れるべきであると主張する。そのためには、芸術の社会におけるあり方、成り立ちを改めて検討する必要がある、そのプロセスがアトリテラシーの向上とともに、内側からの社会変革の方法論となる可能性を秘めていると林は説く。
- 19) 芳賀 (2002) p.201
- 20) 鏑木 (1989)
- 21) 海野 (2007)、山室 (2009)、富永 (2009) などが挙げられる。
- 22) 山室 (2009) p.328
- 23) 例えば、1967年、美濃部亮吉が都知事に。各地でも革新知事が誕生。1968年、パリ五月革命、プラハの春、東大全共闘安田講堂占拠、佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争、川端康成ノーベル文学賞受賞、核拡散防止条約調印 (日本は70年調印)、三億円事件、金嬉老事件、カネミ油症事件。1969年、東大安田講堂攻防戦、「水俣病を告発する会」発足、佐藤栄作訪米阻止闘争 (羽田闘争)、アポロ11号人類初の月面着陸。1970年、大阪万博、よど号ハイジャック事件、三島由紀夫自衛隊市ヶ谷駐屯地にて割腹自殺。これだけのこと、いやこれ以上にさまざまなことが、1968年をまたぐ数年間に起きた。
- 24) 吉見 (2009) p.50
- 25) 池口 (1967) p.277
- 26) 小松 (1969) p.82
- 27) 池口 (1967) p.91
- 28) 池口 (1967) p.91
- 29) 池口 (1967) p.285
- 30) 松尾芭蕉の弟子向井去来の草庵。芭蕉も滞在し嵯峨日記を著したとされる。
- 31) 林屋 (1985) p.150
- 32) 美術批評家榎木野衣が『日本・現代・美術』の中で用いた言葉。もとは1973年に批評家彦坂尚嘉が『美術批評』に発表した具体美術協会やもの派に関する論考の中で用いた言葉である。「同じ場所において同じ問題を多様に反復しているだけ」である日本を「悪しき場所」とし、その中で奇妙な堂々巡りを続ける悪循環についてを「閉じられた円環」と呼んだ。
- 33) 池澤 (2008) pp.133-134

- 34) 井口 (2007) pp.15-16  
35) Brantlinger (1983 = 1986) p.8  
36) 例えば、拙稿「京都から考える文化と持続可能性」で述べたように、京都西陣における特別工業区指定とその後の西陣の衰退の例からもわかるように、たとえ地域住民からの強い要望によって、よかれと思っ  
て行われた政策であったとしても、文化を喪失させてしまうことがあることを忘れてはなるまい。  
37) 川端 (1969) p.10  
38) 芳賀 (2002) p.314

#### 参考文献

- 井口典夫編 (2007) 『成熟都市のクリエイティブなまちづくり』 宣伝会議  
池口小太郎 (1967) 『日本の地域構造』 東洋経済新報社  
池澤夏樹 (2008) 『パレオマニア 大英博物館からの13の旅』 (集英社文庫版) 集英社  
海野弘 (2007) 『20世紀』 文藝春秋社  
鍋木清方 (1989) 『隨筆集 明治の東京』 岩波書店  
川端康成 (1969) 『美しい日本の私—その序説』 講談社  
小松左京 (1969) 『日本タイムトラベル 変貌する地域社会』 読売新聞社  
黒川紀章 (1987) 『共生の思想』 徳間書店  
黒川紀章 (2006) 『都市革命 公有から共有へ』 中央公論新社  
権修珍 (2004) 「W. モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動からみる文化の保存価値」 『政策科学』 11 巻 2 号  
pp.105-118  
佐和達児 (2009) 「京都から考える文化と持続可能性」 『サステナ』 第 10 号 pp.92-95  
榎木野衣 (1998) 『日本・現代・美術』 新潮社  
志賀野桂一 (2006) 「創造都市に向けた文化政策のリノベーション—<仙台クラシックフェスティバル 2006 >  
の挑戦—」 『アートマネジメント研究』 第 7 号 pp.13-23  
絳秀実 (2003) 『革命的な、あまりに革命的な—「1968年の革命」史論』 作品社  
絳秀実 (2006) 『1968年』 筑摩書房  
鈴木博之 (1999) 『日本の近代 10 都市へ』 中央公論新社  
武田晴人 (2008) 『高度成長—シリーズ日本近現代史 (8)』 岩波書店  
富永茂樹 (2009) 「転回点を求めて—序論」 富永茂樹編 『転回点を求めて—1960年代の研究』 世界思想社  
中村隆英 (1993) 『昭和史 I・II』 東洋経済新報社  
芳賀徹 (2002) 『詩歌の森へ』 中央公論新社  
林容子 (2004) 『進化するアートマネジメント』 レイライン  
林屋辰三郎 (1985) 『京都文化の座標』 人文書院  
Patrick Brantlinger, (1983) 'BREAD & CIRCUSES Theories of Mass Culture as Social Decay. Cornell University  
Press.= 『パンとサーカス』 小池和子訳 1986 勁草書房  
蓑豊 (2007) 『超・美術館革命—金沢 21 世紀美術館の挑戦』 角川 one テーマ 21  
山室信一 (2009) 「「近代」の奔流と逆流」 富永茂樹編 『転回点を求めて—1960年代の研究』 世界思想社  
吉本光宏監修 国際交流基金編 (2006) 『アート戦略都市—EU・日本のクリエイティブシティ』 鹿島出版会  
吉見俊哉 (2009) 『ポスト戦後社会—シリーズ日本近現代史 (9)』 岩波書店  
チャールズ・ランドリー 後藤和子監訳 (2003) 『創造的都市 都市再生のための道具箱』 日本評論社